

【プログラム】

○ ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第31番変イ長調 op. 110

ベートーヴェン、後期の3大名曲ソナタ（30～32番）の一つです。1821年に作曲され、自筆譜にはクリスマスの日付があります。この時期は、『交響曲第9番「合唱付き」』・『荘厳ミサ曲』・『ディアベッリ変奏曲』といった大作・名作が相次いで作曲されており、作曲家としての創作期の頂点を築いていました。

形式的にも内容的にも独創的な魅力にあふれている曲で、第30番のソナタや最後のピアノ・ソナタとなった32番同様、高貴な抒情性と深い思索性を感じさせます。特に、第3楽章に2回登場する「嘆きの歌」と呼ばれている部分やフーガには、この当時のベートーヴェンの高く深い創作意欲が強く表れています。

第1楽章 モデラート・カンタービレ・モルト・エスプレッシオーヴォ、変イ長調、4分の3拍子、ソナタ形式。

第2楽章 アレグロ・モルト、ヘ短調、4分の2拍子。スケルツォ、複合3部形式。

第3楽章 アダージョ・マ・ノン・トロポで始まる序奏。その後、変ロ短調から変ホ短調を経て、変イ短調の「嘆きの歌」を導く。

○ ショパン：夜想曲第13番ハ短調 op. 48の1

夜想曲はノクターンとも呼ばれており、アイルランドの作曲家ジョン・フィールド（1782－1837）によって確立されたといわれています。しかし、なんともいってもそれを芸術性高く完成させたのはショパンです。ショパンの夜想曲は、左手の和弦的な伴奏に乗って右手が装飾音に彩られた抒情的な旋律を奏でるもので、ほとんど例外なくA－B－Aの三部形式を守っています。ショパンは全部で21曲の夜想曲を作曲していますが、その創作時期はワルシャワ音楽院時代から死の3年前までほとんど全生涯にわたっており、彼の作曲家としての経緯をたどることができます。

中でも第13番は彼のパリ時代の円熟期の作品で、規模も雄大です。大胆な転調や3連符の連打音が多用され、英雄の賛歌をうたいあげます。ノクターンというよりバラード的な要素が強く感じられる曲です。

レント、4分の4拍子、三部形式。

○ グリーグ：「ペール・ギュント」第1組曲

グリーグの生地ベルゲンは、フィヨルド地方独特のノルウェー随一の港町です。北欧演劇が盛んで若き日のイプセン等もこの町の劇場で活躍しました。舞台演劇のバックに流す音楽としてグリーグが作曲を依頼されたのは、1874年のことでした。ペール・ギュントとは、

放蕩者の名前。ペールは許嫁（いいなずけ）のソルヴェーグを残したまま、長い旅に出掛け数々のドラマを体験し、やがて年老いて故郷に帰ります。故郷では健気にもソルヴェーグが彼を待ち続けており、彼は彼女の腕の中でやがてドラマティックに過ごした生涯を閉じます。

「第1組曲」は、合計26曲の劇付随音楽の中から4曲を抜粋した物で1888年に成立しました。

「朝」・・・第4幕への前奏曲です。モロッコ海岸のすがすがしい朝の気分を表現しています。学校の、朝の音楽としてもよく使われている曲です。

「オーゼの死」・・・第3幕の前奏曲として、また第4幕の中でも使われる曲です。久しぶりに故郷に帰ったペールを待っていたのは、年老いた母オーゼでした。オーゼはとりとめもないペールの冒険話を聞きながら、やがて静かに息を引き取ります。

「アニトラの踊り」・・・アラビアの砂漠で出会ったベドウィン族長の娘アニトラの踊りを見て、ペールはその美しさに眩惑されてしまいます。第4幕の音楽です。

「山の魔王の宮殿にて」・・・ペールは、魔王の娘を追って山奥の魔王の宮殿に入り込んでしまいます。そこでは、トロル（北欧の怪物）たちが歌い踊っています。ペールは娘婿になるため、トロルたちの仲間に入ってしまう。勇壮な気分の人気曲です。

○ シューマン：交響的練習曲 op. 13

シューマンのピアノ音楽の中でも、最高の名曲の一つに数えられている曲集です。着手したのは1834年、シューマン24歳の時でした。思いを寄せていた令嬢エルネスティーネの父フリッケン男爵による主題（テーマ）を用いた、数々の変奏曲です。推敲に推敲を重ね、1837年6月に楽譜出版されました。主題の後に12の練習曲（エチュード）が含まれ、それをシューマンは「交響的」と名付けました。これは「交響曲のように」拡大していくという思いと、各部分が「詩的に響き交わすように」という願いを持っていたようです。

ロマン的な理想から生まれたこの曲は、後の演奏技術を先取りするかのように非常に独創的なピアノニズムに彩られた革新的な曲でもあります。約40分あまりもかかる大曲です。